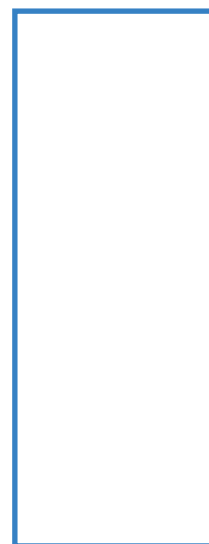


UNKNOWN

2016

展覧会記録集



東京造形大学
絵画専攻 近藤昌美セレクト

×

慶応義塾大学
美学美術史学専攻 有志

藍画廊・ギャラリー現 / 2016. 8.22 (mon) — 8.27 (sat)

UNKNOWNNS

2016

展覧会記録集

「UNKNOWNNS 2016」

2016年8月22日(月)～8月27日(土)
オープニングレセプション 8月22日(月) 17:00～

東京造形大学 絵画専攻
近藤昌美(東京造形大学教授) 菊池遼(院二) 瀬端秀也(院二) 品川はるな(四年)

×

慶應義塾大学 美学美術史学専攻
後藤文子(慶應義塾大学准教授) 亀山裕亮(院一) 鈴木梨歩(院一) 杉本渚(院一)

藍画廊(参加作家: 菊池 / 瀬端)
〒104-0061
東京都中央区銀座 1-5-2 西勢ビル 2F
Tel/Fax 03-3567-8777

ギャラリー現(参加作家: 品川)
〒104-0061
東京都中央区銀座 1-10-16 銀座一ビル 3F
Tel/Fax 03-3561-6869
050-3310-1321

UNKNOWNNS 2016 展によせて

今回で 5 回目となり、おそらく最終回ということになる本学東京造形大学と慶応義塾大学による学生同士の作品とその批評による交流展“UNKNOWNNS”展ですが、元々はその第 1 回目の前年に私が企画した 3 つの美大による交流展が 1 年で頓挫したことを受け、旧知の慶応義塾大学の故近藤幸夫先生にご相談したのがきっかけでした。幸夫先生は「では、こうしましょう」とご自身のゼミ生との交流展のご提案をしてくださり、この“UNKNOWNNS”という展覧会名も幸夫先生のご発案でした。

その意味は参加する両大学の学生はまだ“無名であり知られざるもの”であるからとのこと。こうしてこの「作品」と「批評」という一見当たり前の組み合わせでも学生同士では見られなかった交流展が始まったのです。

しかし、それは 2014 年 2 月の幸夫先生の急逝によりたった 2 回でその中心を失ったのでした。しかしその後もその 2014 年は和田菜穂子先生、2015 年は慶応義塾大学アートセンターの渡部葉子先生が関わってくださりどうにか形になりました。そして今回は後藤文子先生のご指導の元、本展が開催される運びとなりました。

今まで参加した本学の卒業生たちすべては既に“知られているもの／Known”となっています。しかし、本展の役割も今回で一区切りをつける時節になったと感じています。それは幸夫先生のご存命でもそうだったかはわかりませんが、5 年 5 回目という今回で終わらせ、時期を見てどんな形ででも仕切り直すという方が幸夫先生のご遺志も大切にできるような気がするからです。

とはいえ、今年度も力のある学生たちが参加します。皆様のご高覧をあらためてお願いいたします。

東京造形大学 絵画専攻教授 近藤昌美

菊池 遼

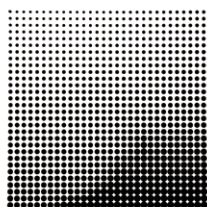
kikuchi ryo

exhibition

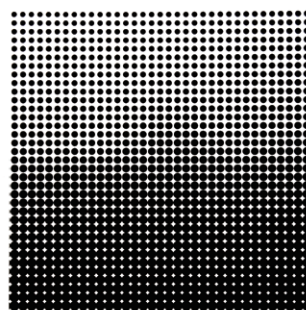
1991 青森県生まれ
2015 東京造形大学 造形学部美術学科絵画専攻 卒業
2015 東京造形大学大学院 造形研究科美術専攻領域 入学
現在 同大学院在学

exhibition

2012 new face 展 (turner gallery)
2013 ぞうけい展 (design festa gallery)
2014 アートプログラム青梅 (青梅総合高等学校)
2015 ZOKEI 展 (東京造形大学)
TURNER AWARD 2014 入選・入賞者展 (turner gallery、地方巡回)
東京五美術大学連合卒業・修了制作展 国立新美術館
母袋ゼミ abflug 展 (アーツ千代田 3331)
第二回 CAF 賞作品展 (アーツ千代田 3331)
M ポリフォニー 2015 アンゲル (東京造形大学)
アートプログラム青梅 (cafe ころん)
2016 M ポリフォニー 2015 アンゲル (東京造形大学)

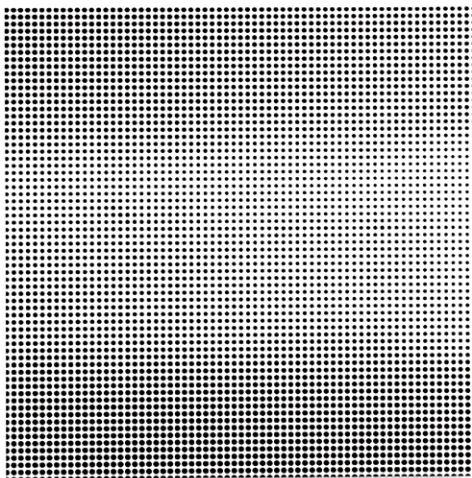


2

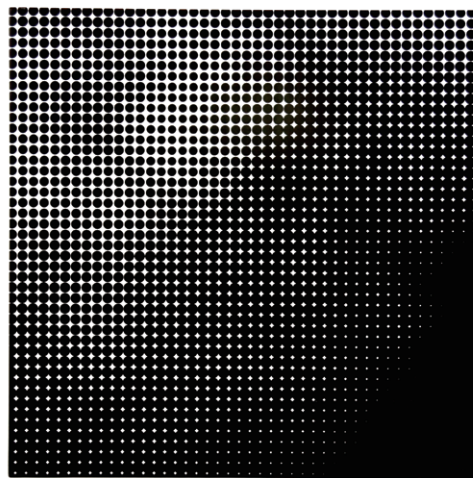


3

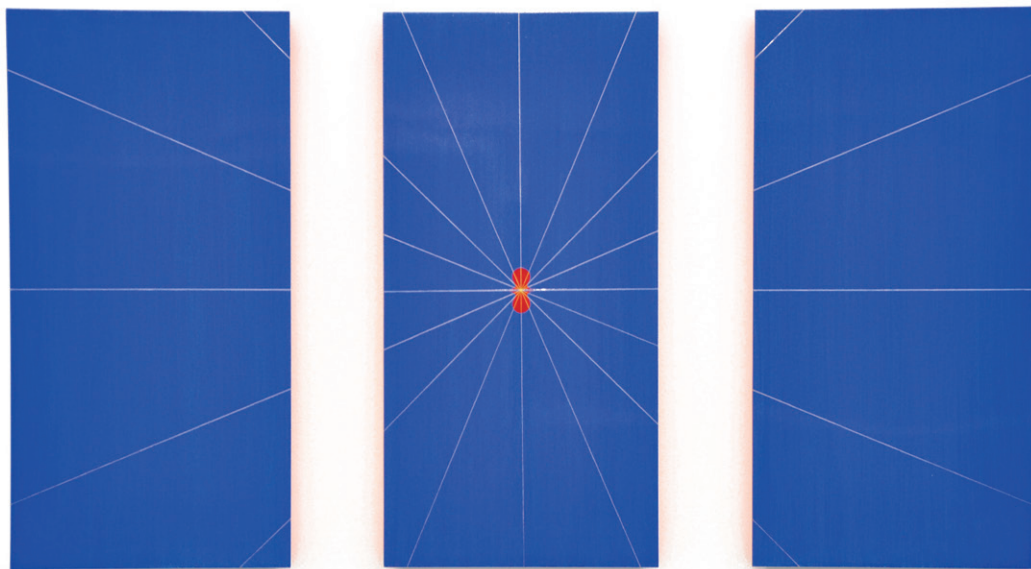




4

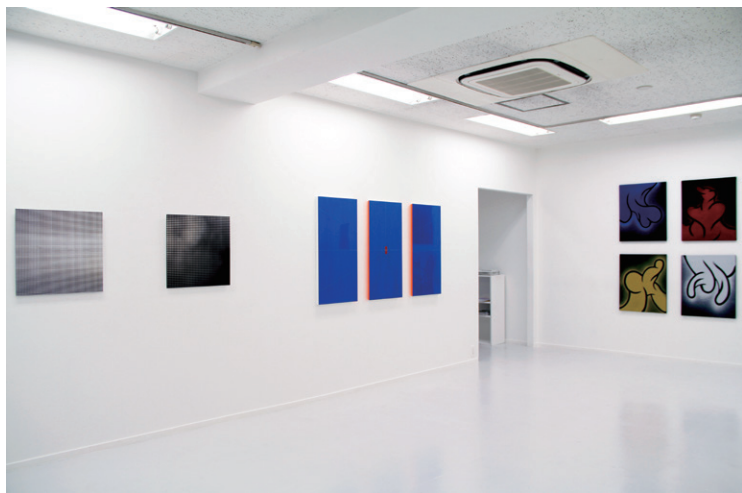


5



6

1. 《idea #2 〈Chauvet〉》 パネルにアクリル絵具 91×150cm 2016
2. 《void #1》 パネルにアクリル絵具 20×20cm 2015
3. 《void #2》 パネルにアクリル絵具 30×30cm 2015
4. 《umbilical #2》 パネルにアクリル絵具 89.5×163.5cm 2016
5. 《void #3》 パネルにアクリル絵具 50×50cm 2015
6. 《void #4》 パネルにアクリル絵具 50×50cm 2015



展示風景（藍画廊）

分節された世界で「作る」ということ

——菊池遼の作品を通じて——

私たちがいま目の前に広がる世界に対峙するとき、それはすでに分節された世界である。コップはコップとして、そのなかの水や、置かれているテーブルとは区別されたものとして、明確な輪郭をもって私たちの前に現れてくる。菊池が三つのシリーズにおいて探究しているのは、このような、分節とそれによって形作られる存在のあり方の問題である。

「void」は写真をハーフトーン化し、画面に定着したシリーズだ。漠然とした濃淡で埋め尽くされた画面を見ていると、じきに、影のようなものが浮かび上がってくる。だが、見えた、と思ってその影に眼を凝らしてみると、その姿はかえってぼんやりとして捉えがたくなる。結局それが「何であるのか」は分らない。

ここで表現されているのは、未分化の状態ではない。そこには地から浮かびあがる図らしきものがある。菊池がここで示したのは、そこに貼りつけられるラベルがないのに、分節は存在している、という「輪郭的」なもののあり方なのである。

すると、その「輪郭」を生じせしめた根源的な分節とは何なのか、という疑問が出るだろう。それに答えるのが「umbilical」シリーズである。三分割されたパネルが、一点透視図法の集中線によって統合されている。バラバラで分節化されていると同時に一つでもある、という二重のあり方をしているのである。ここには、分節化されたものと未分化なものとが二重に表現されている。

そして、その遠近法の消失点におかれるのは、記号的に描かれた水平線上の太陽だ。これによって菊池は、旧約聖書の冒頭に描かれたような天地創造、あるいは卵細胞分裂という二つの根源的分節を象徴化している。

「idea」シリーズにおいては、分節という行為自体がさらに批判的に主題化された。画面上に定着されているのは古代の洞窟画だ。菊池はその上にさらに自分自身で輪郭線を引き、作品とした。洞窟画の線とその上に引かれた菊池の線とを比べてみると、そこにはわずかな差異や選択が存在していることがわかる。

洞窟画の線は、古代の人々が遺した分節行為の痕跡だといえよう。それならば、菊池の行なった線の引き直しは、彼らの分節の再分節である。彼は自己言及的に分節行為を意識化することによって、分節体系の読みかえ、ないし書きかえを試みているのだ。彼の作り出した画面を見ると、ふだん見ている世界がわずかに揺さぶられる不安とともに、既存の分節体系からの自由を感じることができる。

亀山裕亮

慶應義塾大学大学院 文学研究科 美学美術史学専攻

修士課程 1 年

瀬端 秀也

sebata shuya

biography

1992 茨城県生まれ

2015 東京造形大学 造形学部美術学科絵画専攻 卒業

2015 東京造形大学大学院 造形研究科美術専攻領域 入学

現在 同大学院在学

exhibition

2013 press (文房堂ギャラリー)

2014 press (文房堂ギャラリー)

2015 ZOKEI 展 (東京造形大学)

東京五美術大学連合卒業・修了制作展 (国立新美術館)

山から展 (六本木 605 ギャラリー)

11print exhibition (文房堂ギャラリー)

2016 NEO JAPONISM : SHUNGA (ロサンゼルス日本文化センター)





4



3



5



6

1. 《「
2. 《「
3. 《「
4. 《「
5. 《「
6. 《「

- 3」》キャンバスにアクリル絵具 195×162cm 2016
- 4」》キャンバスにアクリル絵具 130×162cm 2016
- 5」》キャンバスにアクリル絵具、スプレー 65×53cm 2016
- 6」》キャンバスにアクリル絵具、スプレー 65×53cm 2016
- 7」》キャンバスにアクリル絵具、スプレー 65×53cm 2016
- 8」》キャンバスにアクリル絵具、スプレー 65×53cm 2016



展示風景（藍画廊）

「モンスター」、再構築

画面いっぱいを埋める奇妙な形。うごめくように波打つ黒い線が、鑑賞者の前に見たことのない形を浮かび上がらせている。それは、キャンバスが狭いとばかりに断ち切れて、全体像を明らかにしない。黒い空間から浮かび上がる生々しい赤の色使いは、血肉を連想させる。単色の背景と黒で縁取られたいびつな形象はいったい何なのだろうか。瀬端秀也の作品は、シンプルでありながら、鑑賞者に強いインパクトを残していく。

この名前の付けられない形を、瀬端は「モンスター」と言う。絵画を始める以前、彼は版画で「モンスター」をテーマにした作品を制作していた。版画では具体的なイメージが残っていた「モンスター」だが、絵画ではその具体的な部分が消え失せる。これが版画と絵画でのもっとも違う点だ。瀬端の頭の中にあるイメージは、直感に任せて筆を運ぶうちに徐々に消化されていき、新しい「モンスター」の姿となって立ち現れるのである。

「モンスター」という言葉は、怪物や妖怪を意味する。「人が分からない、恐ろしいと思うものに名前と形を与えたのが、怪物や妖怪である」というのは、文化人類学の定説だ。古今東西の怪物や妖怪は、人の恐怖心を反映した恐ろしい姿をしている。しかし、同時にそれらは、奇妙な形によって人を魅了する。怪物や妖怪は、時に愛らしく滑稽に映るのである。瀬端は、自身の作品でこのプロセスを再現していると言える。瀬端のイメージから生み出された「モンスター」は、絵画という無機物とは思えないほどの強烈な生命感によって鑑賞者を圧倒する。しかし、その形の丸みや量感は、どこか憎めないキャラクターを持っている。

瀬端は、自身の「モンスター」を「面白い形」と呼ぶ。そして、自身が生み出した「面白い形」によって、鑑賞者の目を引き、その心に印象を刻むことを望んでいる。そうした意味で、彼の作品は成功しているだろう。それだけのエネルギーが、彼の「モンスター」には確かに宿っているのである。

鈴木梨歩

慶應義塾大学 文学研究科 美学美術史学専攻

修士1年

品川 はるな

shinagawa haruna

biography

1995 東京都生まれ

2013 東京造形大学造形学部美術学科絵画専攻 入学

現在 同大学在学

exhibition

2016 山をぬけて展 (634 展示室)



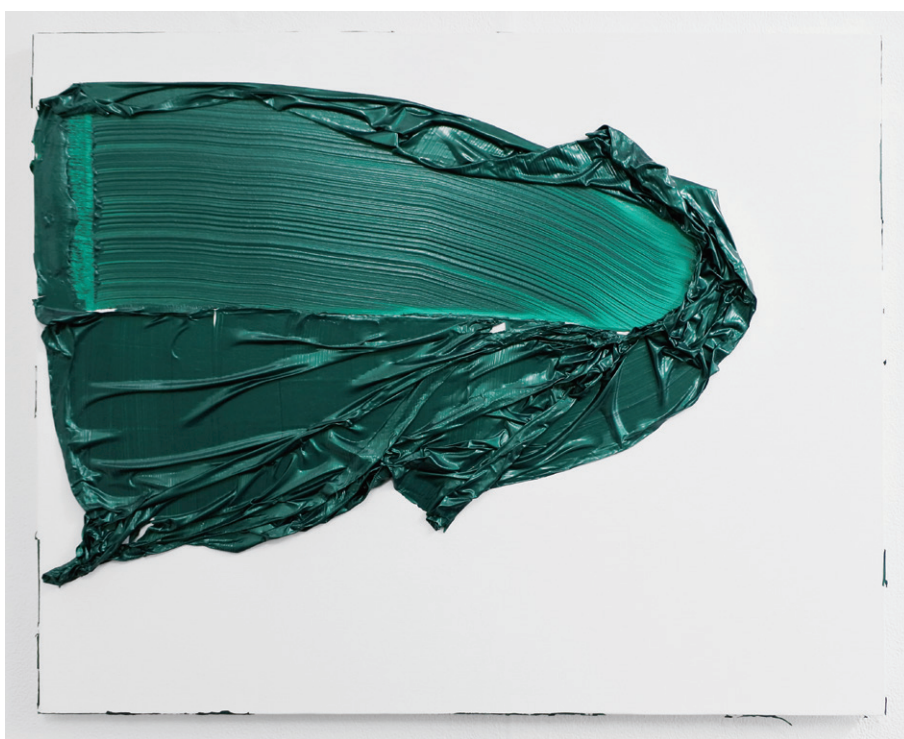
1



2



3



4



5



6



7



8



9

1. 《Peel off the paint" No.23"》キャンバスにアクリル絵具 145.5×112cm 2016
2. 《Peel off the paint" No.24"》キャンバスにアクリル絵具 145.5×112cm 2016
3. 《Peel off the paint" No.25"》キャンバスにアクリル絵具 145.5×112cm 2016
4. 《Peel off the paint" No.19"》キャンバスにアクリル絵具 72.7×91cm 2016
5. 《Peel off the paint" No.09"》キャンバスにアクリル絵具 91×116.7cm 2015
6. 《Peel off the paint" No.16"》キャンバスにアクリル絵具 27.3×22cm 2016
7. 《Peel off the paint" No.15"》キャンバスにアクリル絵具 27.3×22cm 2016
8. 《Peel off the paint" No.20"》キャンバスにアクリル絵具 22×27.3cm 2016
9. 《Peel off the paint" No.18"》キャンバスにアクリル絵具 22×27.3cm 2016



展示風景（ギャラリー現）

知性と感性が宿る絵画——多様な表情を持つ品川はるな作品の魅力

この作品を少し遠くから眺めると、まるで舞台の幕が上がるところのようである。光沢と重みのある布がひだをつくりながら持ち上がって、向こう側の舞台が見えてくる、そんな様子に見える。しかしもう少し近づいて覗いてみると、窓にかかったカーテンのようでもある。舞台の幕のように見えた布は、実はもっと軽くて、それが風で捲れ上がったその瞬間のようだ。さらに間近でじっくりと鑑賞してみるとどうだろう。プレゼントの包装紙か、チョコレートを包む銀紙か、綺麗なつやのある薄い包み紙が引き剥がされて、くしゃくしゃになっているようにも見えてくる。私たちの想像力は止まるところを知らずに広がり続けるのである。しかしその一方で、この作品が、カンヴァスとそれを覆う絵の具の膜という、絵画の物質的な側面を剥き出しにしていることにも私たちは気づかされることになるだろう。品川の作品は、鑑賞者の自由な想像力を掻き立てると同時に、物理的な存在としての絵画の正体を暴露しているのである。

1960年代以降、多くの作家が絵画や彫刻の物質性への関心を強めていった。石や木、金属などの素材にほとんど手を加えずに提示したアルテ・ポーヴェラや、カンヴァスの布や木枠といった絵画の物質的な側面を顕在化したシュポール / シュルファスの作品など、多くの例が挙げられるだろう。品川の作品には、たしかにこれらと共通する関心を見出すことができる。しかしこのような側面がある一方で、品川の作品ならではの魅力とは、なんと言ってもその親しみやすい無邪気さではないだろうか。品川はカンヴァスに塗った絵の具の膜を剥がすという手法を用いるが、以前にはチューブから絞り出した絵の具を何層にも重ね、その絵の具の塊を切ることで立体作品を制作していた。どちらの制作方法についても「絵の具を使ってどんな楽しいことができるだろう？」という、無邪気な遊び心があるように思えてならない。

絵画の物質性への知的な関心と、自由な発想で遊ぶ子供のような豊かな感性、この意外とも言える二面性が、品川の作品に様々な表情を与え、私たちを大いに魅了する。絵の具を剥がす技法はまだ実験の段階で、これからもっと進化させていきたいと品川は言う。知性と感性の絶妙なバランス感覚を持った作品を、今後も制作し続けてくれるに違いない。

杉本渚

慶應義塾大学文学研究科美学美術史学専攻

修士1年

企画：近藤昌美（東京造形大学教授）、後藤文子（慶應義塾大学准教授）
協賛：学校法人桑沢学園 東京造形大学
協力：藍画廊、ギャラリー現
発行編集・デザイン：菊池遼
発行：東京造形大学
2016年9月30日

